

御 挨 拶



4月13日の早朝、ある場所での清掃ボランティアに伺うために準備をしようとしていた矢先に、突然強い揺れを感じました。淡路島付近を震源とした震度6弱の地震。18年前の阪神淡路大震災、また2年前の東日本大震災の記憶が鮮明に蘇り、思わず身を硬くしました。

ほどなくして揺れは収束し、市内で大きな被害は確認されませんでしたでしたが、いつ起こるとも知れない自然災害に日頃から備えることの大切さを改めて痛感しました。

近年、私たちが地震や水害など様々な大規模災害に直面し、また今後南海トラフ大地震が発生する可能性が指摘されるなどの状況の中で、まちの防災力を高めることの重要性が一層大きくなっています。

このため、本市では、橋りょうや建築物の耐震化、帰宅困難者対策、避難所運営マニュアルの策定など、様々な取組を進めてきたところです。本市の消防職員も、まちの安心安全を確保しようと、ますます懸命に日々の職務に取り組んでいます。

しかし、行政のみで全ての課題に対応することは大変困難です。消防団や自主防災会をはじめ、多くの市民の皆様の高いお志と行動があるからこそ、京都のまちはしっかり守られていると感じております。各地域での防災訓練、また年末の特別警戒など、皆様の御活動の場に伺うたびに、私はその思いを強くしています。

本年は、自治体消防が発足して65年目に当たる節目の年。今後も市民の皆様と知恵と力を合わせて、災害に強く、誰もが安心して住み続けられる、「安心都市・京都」を築くために全力を尽くしてまいります。引き続き皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。

京都市長 門川 大作

御 挨 拶



昨年の京都市内における災害を顧みますと、火災件数は一昨年を55件上回る270件を数え、救急件数については、77,997件と過去最多件数を3年連続で更新しました。また、東山区祇園では、軽自動車暴走し、多数の死傷者が発生するなど、多種多様な災害が発生しました。

このような状況を踏まえて、火災への対応については、住宅用火災警報器の普及などにより、火災の初期段階に消防車両が災害現場に到着するケースが増加していることから、より迅速な消火・救助活動が行え、古くから残る木造密集地域の細街路へも進入が可能な新たなコンセプトによる消防車両「速消小型水槽車」を導入し、増加する救急需要については、救急隊の出動分布と到着時間を分析し、市内中心部において救急事故が多発した場合であっても、救急隊が迅速に現場に到着できるよう救急隊を増隊し、救急隊専用の出張所を配置するなど、更なる救命率向上のための体制強化を図っています。

観光を楽しむ人々でにぎわう祇園における事故は、事故発生の経緯を含め社会的にも大きな影響を与えました。災害による悲しみを最小限にしたいとの強い意志を持って、今後の災害現場活動に生かすべく、医師及び医療関係機関の方々にも御参加いただき、当時の現場活動について、救急医療の観点を含めた検証を行いました。検証結果を基に、病院や医師との連携、初動段階における出動部隊の増隊、現場指揮体制の見直しなどを行い、既に集団救急救助事故に係る現場活動において効果を発揮しています。

あらゆる様相の災害と向き合い、対峙する消防は、様々な事象に臨機応変に対応できる「プロフェッショナル」であり続ける必要があります。

今後も固定観念にとらわれず社会情勢に応じた柔軟で弾力的な施策を進め、市民の皆様や地域と共に歩む「地域密着型の消防」と、あらゆる災害現場に的確、果敢に立ち向かう「力強い消防」を構築し、「安心都市・京都」の実現に向けて全力で取り組んでまいりますので、今後とも、皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。

京都市消防局長 長谷川 純